

# 留学生に対する異文化理解に関する授業実践 — アンケート調査活動を中心に —

元木佳江・四宮可苗

## Class Activities of 'Cross-cultural Understanding' of International Students — Focusing on the Activity of Questionnaire Surveys —

Yoshie MOTOKI and Kanae SHINOMIYA

### ABSTRACT

This paper reports on a class activities aimed at deepening the 'Cross-cultural Understanding' of international students through group activity by conducting a questionnaire survey for Japanese students. We will verify the effectiveness of class practice and points for improvement based on the feedback obtained through the questionnaire activities of international students.

As a result of the practice, through the questionnaire survey activities, it was recognized that the international students had attitudes of "respect" and "empathy" toward others, and that they were rethinking their "social beings." On the other hand, we noticed the necessity of efforts to deepen cross-cultural understanding not only from self-reflection, but also from the opinions of others, and suggested co-learning with Japanese students.

KEYWORDS : international students, cross-cultural understanding, international communication skills, questionnaire surveys

### I. はじめに

日本学生支援機構(2022.3)によると,2021年(令和3年)5月1日現在の留学生数は242,444人で,そのうち高等教育機関に在籍する留学生は201,877人となっており,20年前と比べると2倍近く増加している。30年前には約5万人であった留学生は,その後アジアを中心とした多くの国から来日し,大学では多様な文化背景を持つ留学生を受け入れることとなった。これにより,大学という「場」における留学生と日本人の異文化接触に関する諸問題が顕著な形で現れ始めた。加賀美(2016)は,留学生が約10万人になった2002年ごろまでの在日留学生の諸問題を調査した先行研究を概観し,「留学生にとって大学という場とその教育内容だけが必ずしも留学の総合的評価を決定するわけではなく,ソフト面の重要性を示

している」とまとめている<sup>1)</sup>。このことは,受け入れる側の異文化理解教育の必要性を問うものである。

徳井(2020)は多文化共生について,「異なる人々が,互いの文化的差異を認め合い,対等な関係を築こうとしながら共に生きていくこと」(p.3)とし,日本語教育の立場から多文化共生のコミュニケーションについて捉え直している。この「対等な関係」であるということは,逆に言うところ「対等でない関係」があると解釈できる。これは,マジョリティとマイノリティ,支援する側と支援される側といった上下の関係や強者と弱者といった観念が日本社会にあることを意味する。こういった固定観念を払拭し平等な社会を築くため,学校においても早い段階から異文化理解教育が進められている。また,日本語教育人材養成においても「必須の教育内容」<sup>2)</sup>の中に多文化共生,異文化受容・適応,異文

化間教育，異文化コミュニケーション，異文化接触，異文化間教育など異文化理解に関する項目が組み込まれている。このように，異文化理解教育は日本社会において重要な位置づけとなっている。

さて，四国大学では本格的に外国人留学生を受け入れるべく，2016年に短期大学部において外国人留学生プログラム3年コース（以下，「短大」）を開設した。また，2019年度には経営情報学部，2020年度には文学部と生活科学部生活科学科（以下，「大学」）においても特別プログラムを開設し留学生を受け入れ始めた。

「大学」，「短大」とともに1年次には日本語科目が配置されている。特に「短大」では，1年次は日本語教育を中心に科目が編成され，大学で学ぶために必要な日本語力を養いながらゆるやかに専門教育に繋げていくカリキュラムとなっている。1年次の日本語教育内容は，日本語力の育成を目的とした基礎科目と日本社会や文化を学ぶ科目が組み込まれている。中でも特徴的なのは，留学生に対する「異文化コミュニケーション演習」である。この科目では，一定の知識を学んだあとプロジェクトワークを導入し，日本人の考え方や行動の理解を深める学習活動を行っている。プロジェクトワークでは，留学生が自らの興味関心をテーマに日本人学生にアンケート調査を実施する。

先行研究を概観すると，アンケート調査活動を通して留学生の異文化理解の促進を図ったものに梶原(2016)がある。また，異文化理解教育においては，大学における留学生と日本人学生双方の学びとなる協働学習活動を取り入れた授業案を提示した北出(2010)，ディスカッションを通して留学生と日本人学生が異文化理解の促進を図ったものに菅川(2022)がある。本稿では，これらの先行研究と比較しながら，アンケート調査活動による授業実践の有効性と改善点について論述する。尚，本稿の一部は，元木佳江・四宮可苗(2022)「外国人留学生と日本人学生の相互交流を通じた学びの実践」，2022年度第69回中国・四国地区大学教育研究会の研究を論文化させたものである。

Ⅱ章では，留学生に対する異文化理解教育として

本学で実施している「異文化コミュニケーション演習」の授業について概要を説明する。Ⅲ章では，異文化理解を深めるための工夫に触れながら「アンケート調査活動」の内容について詳述する。Ⅳ章では，アンケート調査のテーマや調査活動の振り返りから，留学生の異文化理解の変化について考察する。

## Ⅱ. 「異文化コミュニケーション演習」授業概要

### 1. 留学生に対する異文化理解教育のねらい

外国人として日本で暮らす留学生にとってはすべてが異文化である。にもかかわらず，彼らに異文化理解や異文化コミュニケーションに関する知識が必ずしも備わっているわけではない。中には，自文化を主張し多文化を受け入れようとする留学生も見受けられる。一方で，異文化に適応しようとするあまり，自文化を捨て新たな文化に合わせようと苦悩する留学生もいる。留学生の場合，時間が経つにつれ日本に対する印象が悪くなっていく場合も少なくないという。

場が個や集団に影響を与える視点については，異文化接触に伴う心理的变化を扱った問題が多い(加賀美, 2016, p. 92)。来日1年後に精神健康度が低下する傾向があることを示した井上・伊藤(1997)は，この時期を「日本に対する違和感が生まれる時期に移行したことを示すもの」とし，カルチャー・ショックの一面であることを示した。これらの先行研究は留学生に対する異文化教育を意味づけるために重要な知見であり，外国人留学生科目としての「異文化コミュニケーション演習」が，留学生にとって有益であることを再確認することができるものである。

「異文化コミュニケーション演習」の授業を組み立てるにあたっては，次の2点を授業のねらいとした。1点目は異文化の中で暮らす外国人である自分を客観的に捉えることで，日本で生活する道を選んだことを肯定的に受け止められるようになること，2点目は多様な背景を持つ人々を理解し「尊重」することで，ともに日本で暮らす人として「共感」できる態度を身につけることである。これは，自らを

外国人という括りで捉えるのではなく、人とかがわり合って生きる「社会的な存在」として自分自身を捉え直すことにもつながる。

留学生に求める「尊重」「共感」「社会的存在」としての捉え直しは、理論や知識の習得だけはむずかしい。加賀美（2016）では、大学の授業や教室外活動における異文化接触の実験が、多文化理解において影響をもたらした先行事例を紹介している。次節では、知識の習得と活動を組み合わせた「異文化コミュニケーション演習」の授業について詳説する。

## 2. 「異文化コミュニケーション演習」授業内容

「異文化コミュニケーション演習」の授業の目的は、日本で暮らす留学生が異文化を理解し受け止め、学んだ知識を実生活で活かしながら異文化の中で自分らしく生きる力を身につけることである。そのためのクラス設計として、前半では理論を学び、後半ではアンケート調査を取り入れた活動を行うこととした。

「異文化コミュニケーション演習」の授業は、「大学」クラスと「短大」クラスの2クラスで開講されている。両クラスともアジアを中心に多国籍の学生が履修している。クラスには学習補助要員（以下、TA・SA）として日本人学生が数名配置され、学習補助のほかグループワークの活動に加わり、留学生と意見交換を行うことも役割として与えている。

### 【授業概要】

科目名：異文化コミュニケーション演習  
履修者：外国人留学生 「大学」クラス、「短大」クラス<sup>3)</sup>  
開講期：前期（4月～8月）  
授業時数：15回（1回90分）  
指導者：日本語教員1名  
TA・SA：「大学」クラス、「短大」クラス 各数名  
テキスト：原沢伊都夫（2013）『異文化理解入門』研究社  
参考文献：八代京子他（2001）『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

授業の到達目標は、まず異文化理解に関する理論を理解すること、次に学んだことを実生活で活用できるように考えること、最後に調査活動を行い日本人の考えを知り、異文化理解を深めることとした。

授業全体の構成は、前半（第1回～第9回）では異文化理解に関する理論や知識を学ぶ【理論編】、後半（第10回～第15回）では日本人学生を対象にした「アンケート調査活動」を行う【活動編】の2部構成とした。【理論編】で学ぶ内容は、後半のアンケート調査活動のテーマを決める際、重要な手掛かりとなる。前半の【理論編】で取り扱った学習は表1の通りである。

次章では、【理論編】を踏まえて行った「アンケート調査活動」について2021年度の実践を取り上げて詳述する。

表1 「異文化コミュニケーション演習」第1回～第9回【理論編】学習内容

回	学習トピック	テキスト 該当箇所
第1回	オリエンテーション、異文化とは	第1章
第2回	文化とは、見える文化、見えない文化	第2章
第3回	異文化適応、カルチャーショック、U字曲線、W字曲線	第4章
第4回	固定観念、ファイリング、ステレオタイプ	第7章
第5回	個人主義と集団主義、高文脈文化と低文脈文化、モノクロニックとポリクロニック、自己開示	第9章 第12章
第6回	非言語コミュニケーション①（身体動作、身体的特徴、接触行動）	第13章
第7回	非言語コミュニケーション②（パラ言語、空間、人工品）	第13章
第8回	言語コミュニケーション（自己紹介、謝る）	-
第9回	アサーティブコミュニケーション	第14章

### Ⅲ. 「アンケート調査活動」授業実践

#### 1. 活動の目的

「アンケート調査活動」の目的は、Ⅱ-2で述べたように、日本人から生の声を聞くことで異なる文化に対して自らの考えを持ち理解を深めることである。初回の授業で「大学生活で何を期待するか」と留学生に聞くと、「日本人の友達を作りたい」という答えが返ってくる。しかし、実際に日本人と話す機会が十分にできた、また、親しい友達ができたという話は、来日してから1年経過してもあまり耳にしない。留学生が日本人学生と友人関係を築きたいと考えているにも関わらず、それが困難だという状況は多くの留学生にとって共通の悩みである（梶原2016, p. 28, 菅川2022, p. 8）。梶原（2016）は、「日本語のレベルと関係なく「むずかしい」とされる共通の課題かつ習得したいと思う能力、それは「知らない日本人に話しかける」という能力である」（p. 28）と述べているが、留学生にとっては日本人にまず「話しかける」ことが第一の難関となっているのである。

日本人の友達がができるためには、ある種のきっかけが必要である。そこで、アンケートの対象を同年代の日本人学生とすることによって、アンケート活動を通して日本人学生と接触する機会を作り、交流のきっかけとなることを期待した。梶原（2016）では、日本人に話しかける力を養うために行ったアンケート活動の後、留学生がアンケート協力者と実生活で接する機会が増え、「知り合い」になっている

ことが示されている（p. 35）。これらの事例から、「アンケート調査活動」は、日本人とつながるきっかけにもなるという副次的効果も期待できる。

#### 2. 活動の概要

「アンケート調査活動」は第10回から開始するが、心積もりのためにコース開始時から事前準備を行った。第1回のオリエンテーションではコース後半で「アンケート調査活動」を行うことを伝えた。その際、活動をイメージできるよう昨年度の発表動画やPPTを紹介した。また、第1回～第9回の授業では、調査テーマ決定のための下準備を行った。毎回授業後にその日の学習内容を振り返り、「アンケート調査活動」について今の考えを提出させ、アイデアを蓄積させることにした。このように後半の【活動編】にスムーズに取り掛かれるように丁寧に準備を行っていった。

第10回から3コマを使って質問紙を作成する。第13回の授業までにアンケート調査を行い、第13回で発表資料の作成を行う。そして、第14、15回に「アンケート調査報告会」を開催する。第15回には振り返りを行い全体で共有する（図1）。

調査人数は日本人学生20名以上とした。テーマは①授業前半の【理論編】で学んだ学習トピック（表1）をふまえたもの、または、②自分たちの興味関心のある自由トピックの2つから選択させた。グループは1グループ1～4名<sup>4)</sup>とし、グループを作る際は学科、国籍、日本語レベルが偏らないよう

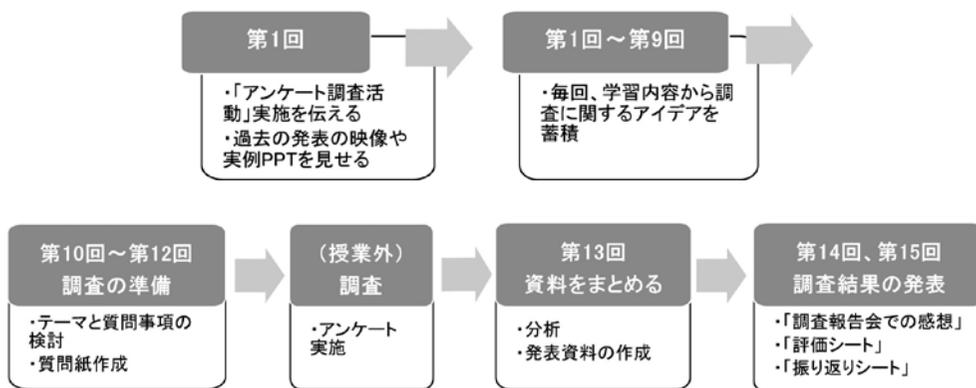


図1 「アンケート調査活動」を中心とした授業全体像

留意した。このようなグループ分けを行うことで、アンケート調査で生じる外国人と日本人という集団間の異文化接触にとどまらず、グループ内で個と個の異文化接触（加賀美2016）が生じ、相互理解が深まることを期待した。

### 3. アンケート調査報告会

報告会は以下の日程で行った。新型コロナウイルスの影響で「大学」クラスの1回目の報告会はオンラインで実施した。「短大」クラスは2時限連続で同日に実施した。

#### 「大学」クラス

9グループ 26名

報告会① 2021年7月21日（水）4限目 5グループ

報告会② 2021年8月4日（水）4限目 4グループ

<発表テーマ>

- D 1. 個人主義と集団主義
- D 2. 日本人の自己開示について
- D 3. 在留外国人についての日本人の考え方
- D 4. 外国人と働くロボットについての調査
- D 5. 大学生のオンラインと対面授業についての調査
- D 6. 日本人学生の外国語について
- D 7. 日本人大学生の旅行についての調査
- D 8. 運動と健康の関係
- D 9. 日本人大学生の時間管理や使い方について

#### 「短大」クラス

11グループ 42名

2021年7月29日（木）1限目, 2限目

<発表テーマ>

- T 1. 個人主義と集団主義についての調査
- T 2. 個人主義と集団主義について
- T 3. 非言語コミュニケーション（身体動作）
- T 4. 日本人の見た目についての考え方の調査
- T 5. 日本人学生の接触行動について
- T 6. 大学でのカルチャーショックについての調査
- T 7. 日本人学生の時間の使い方についての調査
- T 8. 固定観念についてのアンケート調査
- T 9. 外国人の友達
- T 10. 日本人の大学生活についての調査報告
- T 11. 日本人の話し方についての調査

※記号「D」は大学, 「T」は短大を示す。

#### 4. 活動の評価

評価は、他グループの発表に対して行う評価と、他者からの評価を受けて振り返る自己評価の2段階で行った。

まず、他グループの発表に対しては「評価シート」を用いて行った。「評価シート」は、発表のスキル面と内容面について評価を行った。スキル面については、「話し方」「わかりやすさ・内容」「パワーポイント」「質疑応答」の4項目に対して、「改善の必要がある(1)」「もう少し(2)」「ふつう(3)」「よい(4)」「とてもよい(5)」の5段階で評価を行った。(1)(3)(5)については、各項目に判断基準を示した。内容面についてはコメント欄に記述式で記入するようにした。

他グループの発表に対する「評価シート」の記入が終わると、次はその評価シートをグループごとに集め、自分のグループについて書かれた「評価シート」の内容をグループ内で確認する。グループで改善点や成果を確認した後、「振り返りシート」に記入し、最後にクラス全体で振り返りの内容を共有した。「振り返りシート」は「評価シート」の4項目に「準備作業」を加え5項目とし、グループ内での協力も自己評価の対象とした。評価は、自身の発表に対する評価だけではなく、自分の伝えたいことがどのように相手に伝わったのかということや相手の伝えたいことがどれだけ理解できたかを確認することもできる。そのため、コメント欄の記述は丁寧に行うよう指導を行った。

#### IV. 「アンケート調査活動」結果と考察

本章では「アンケート調査活動」を調査テーマおよび報告会を含む調査活動に関するコメントを分析しながら、留学生がどのようなことに関心を持ち、異文化理解を深めたのか、また、活動を通してどのような変化があったのかについて検証し、その結果を考察する。

##### 1. 調査テーマについて

アンケート調査で設定した調査テーマからは、留

学生が日本人学生に対してどのようなことに興味関心を抱き、理解を深めたいと考えたかが推察できる。

表2-1、表2-2、表2-3は調査テーマを3つのカテゴリーに分けて示したものである。カテゴリーの分類は、【理論編】で学んだトピック（以下、学習トピック型）をテーマにしたものを【A群】、授業で学んだこと以外で興味関心を持ったトピック（以下、自由トピック型）をテーマにしたものを【B群】、【A群】と【B群】の両方のトピックが含まれる（以下、混合トピック型）テーマのものを【C群】とした。右列の「トピック・キーワード」は、それぞれのテーマについて学習トピックまたはキーワードを示したものである。

【A群】は「大学」2、「短大」8の計10グループとなっており、テーマの選定において学習トピック型に分類されたグループは全体の半数を占めていることがわかる（表2-1）。【B群】の自由トピック型に分類されたグループは「大学」6、「短大」2の計8グループ（表2-2）、【C群】の混合トピック型に分類されたグループは「大学」1、「短大」1の計2グループ（表2-3）となった。

以上の結果から、「大学」と「短大」に差はあるものの、全体の半数以上が学習トピックをテーマの中に取り入れていることがわかる。これは、テーマを考える際、教師が「学習した内容を選ぶと理解が深まる」というアドバイスを行ったことが要因の一つとあげられるが、アンケート活動を通して実態を確認したいという探求心の表れとも捉えられる。

次に、「トピック・キーワード」をカテゴリー別に見てみる。

まず、【A群】の学習トピック型では3つのグループが「個人主義と集団主義」と「非言語コミュニケーション」に該当し、「自己開示」、「カルチャーショック」、「固定観念」、「モノクロニックとポリクロニック」はそれぞれ1グループであった。「モノクロニックとポリクロニック」は、【C群】の混合トピック型でも選択されている。

【A群】で「個人主義と集団主義」を選んだグループが多かった理由は、今まで日本人は集団主義であ

ると考えていたが、授業で「集団主義と個人主義の両方を持ち合わせている（原沢，2013）」<sup>6)</sup>と学び、同世代の若者はどのように考えているのか確かめたいと考えたからではないだろうか。「非言語コミュニケーション」<sup>7)</sup>を選んだグループについては、授業で日本と母国、また世界の国や地域と比べながらその差異を学んだことから、日本での非言語コミュニケーションの実際についてさらに興味関心を抱き調査をしようと考えたのではないだろうか。その他のグループについても、前半の【理論編】で抱いた疑問や興味からテーマが選定されている。【A群】の留学生は学習トピックを切り口にして日本人や日本人学生の

実態について理解を深めたいと考えたとと言える。

【B群】の自由トピック型を見てみると、「外国人」に関するテーマを選んだグループが3グループと最も多く、「授業」、「外国語学習」、「旅行」、「運動・健康」、「大学生活」はそれぞれ1グループであった。トピックからは、留学生と日本人学生に共通する身近な内容に関心を持ち調査を行っていることがわかる。

例えば、トピックが「旅行」のD7は、アンケート調査の目的について「私たちは旅行が好きなので日本人学生の旅行状況について調べてみました。旅行が好きなお人と友達になりたい。機会があれば一緒

表2-1 【A群】学習トピック型 調査テーマとトピック・キーワード

	調査テーマ	トピック・キーワード
D1	個人主義と集団主義	個人主義と集団主義
D2	日本人の自己開示について	自己開示
T1	個人主義と集団主義についての調査	個人主義と集団主義
T2	個人主義と集団主義について	個人主義と集団主義
T3	非言語コミュニケーション（身体動作）	非言語コミュニケーション
T4	日本人の見た目についての考え方の調査	非言語コミュニケーション
T5	日本人学生の接触行動について	非言語コミュニケーション
T6	大学でのカルチャーショックについての調査	カルチャーショック
T7	日本人学生の時間の使い方についての調査	モノクロニックとポリクロニック <sup>5)</sup>
T8	固定観念についてのアンケート調査	固定観念

表2-2 【B群】自由トピック型 調査テーマとトピック・キーワード

	調査テーマ	トピック・キーワード
D3	在留外国人についての日本人の考え方	外国人
D4	外国人と働くロボットについての調査	外国人
D5	大学生のオンラインと対面授業についての調査	授業
D6	日本人学生の外国語について	外国語学習
D7	日本人大学生の旅行についての調査	旅行
D8	運動と健康の関係	運動、健康
T9	外国人の友達	外国人
T10	日本人の大学生活についての調査報告	大学生活

表2-3 【C群】混合トピック型 調査テーマとトピック・キーワード

	調査テーマ	トピック・キーワード
D9	日本人大学生の時間管理や使い方について	モノクロニックとポリクロニック+大学生活
T11	日本人の話し方についての調査	高文脈文化と低文脈文化+外国人

に行きたい<sup>8)</sup>」(原文ママ, ただし, 下線部は筆者加筆修正)と述べている。「旅行」という共通する話題からお互いの価値観を理解しようとしていることが窺える。T10の「日本人の大学生活についての調査報告」の質問項目には, 在学中に取得した資格や生活費はどのように工面しているかというものがあった。このグループの調査からは, 日本人学生から身近な情報を得たいという意図が窺える。

以上から, 【B群】のグループは, 調査結果を大学生活に役立てたいという考えがあることが推察される。

【C群】については, D9は「時間」をテーマに学習トピックの「モノクロニックとポリクロニック」と自由トピックの「大学生活」の2つを組み合わせる調査している。T11は「話し方」をテーマに学習トピックの「高文脈文化と低文脈文化」と自由トピックの「外国人」を組み合わせる調査している。これは, 【A群】で見られた傾向と同じく授業で疑問や関心を持ったことに加え, さらに興味関心を持った対象や項目を限定して調査を行ったものと考えられる。

### 3. 留学生のコメントについて

本節では, 「調査報告会での感想」, 「評価シート」, 「振り返りシート」におけるコメントの記述を引用しながら「アンケート調査活動」を通して留学生が日本人に対する理解をどう深めていったかを考察する。

以下は「調査報告会での感想」と「振り返りシート」に書かれたコメントから調査内容に関連した内容を抽出したものである。

【A群】のコメントを見ると, (ii)(vi)(vii)からは調査活動を通して新たな気づきや発見があったこと認められる。(i)(iv)からは, 学習トピックについて再確認ができたことがわかる。また, (iii)(vi)には, 【理論編】で知ることができなかった様々な実態について知ることができたとある。留学生は調査活動を通して日本人や日本人学生に対して自分なりの考えを得ることができたのではないだろうか。北出(2010)は, 日本語教育において「学習者が主体となり, 目標言語を使用する相手とのコミュニケーションまたはコミュニティに参加することによって異文化理解および自己の再認識をすることが重要な目標」(p.67)とし, 講義だけでなく, 個人的な異文化間

#### 【A群】学習トピック型をテーマにした留学生

- (i)「日本人はみんなモノクロニックタイムではないと分かった」(T7)
- (ii)「約束した時間に遅れたことがある人は多くて, 驚いた」(T7)
- (iii)「日本人の見た目について色々なことを学ぶことができました」(T4)
- (iv)「多くの日本人は集団主義だとわかりました」(T1)
- (v)「日本人は自己開示に対して, 保留することが多いです」(D2)
- (vi)「四国大学生の中にジェスチャーを使う人が多いです」(T3)
- (vii)「固定観念の影響は様々な面があることにショックを受けた」(T8)

#### 【B群】自由トピック型をテーマにした留学生

- (viii)「今回の調査の結果を見てから自分も日本人男性と同じように対面授業の方が好きであることがわかった」(D5)
- (ix)「たくさんの日本人と友達になろうと思います」(T9)
- (x)「日本人との距離がなくなりました」(T9)
- (xi)「旅行が好きな人といつか集まって旅行することが出来たらいいなとおもいます!」(D7)
- (xii)「アンケート調査活動をして, いろいろな知識を得ました。日本人の考え方もよくわかりました」(D4)

(原文ママ, ただし下線部は筆者加筆修正)

コミュニケーション経験による内省からの学びが必要であると述べている。今回のこの結果から留学生は【理論編】での学びを【活動編】で個人的なものとして捉えることができたと言えるのではないか。

一方、【B群】の自由にテーマを選んだ留学生のコメントには、(viii)(xii)の調査結果に関する感想だけでなく、(ix)(x)(xi)のように日本人との関わりについての感想が見られた。調査テーマのトピック（表2-2）にも表れているように、【B群】の留学生は身近な話題から日本人を理解しようという考えを調査前から持っていたが、調査を通し日本人と親密になりたいという気持ちや今後の交流に活かそうという思いが高まったことが窺える。

以上のように、「アンケート調査活動」を通して、留学生自身いずれも自グループのテーマに関しては異文化に対する理解の変化が認められた。しかし、一方で他グループのテーマについての留学生のコメントは少なく、このことから自グループ以外のテーマについて関心や理解が十分に深まったとは言い難い。

## V. まとめ

本実践により実践者が期待したことは、留学生が異文化理解を深めることによって、相手に対する「尊重」や「共感」、さらには「社会的存在」として自己を捉え直すことであった。「アンケート調査活動」からは、日本人や日本人学生に対する理解の促進や新たな気づきが得られたことが認められた。さらに、【A群】の学習トピック型に分類されたT8グループの「固定観念についてのアンケート調査」では、日本人だけでなく「外国人に関する固定観念」についても調査していた。自分たち「外国人」が日本人学生にどのように捉えられているのかということを知りたいと考えたためである。見方を変えれば、自分たちは「外国人」としてではなく、同じ大学生として同じ立場で、一人の人間として存在していることを理解してもらいたいという気持ちの表れとも考えられる。これらを含め、本実践における「アンケート調査活動」は、異文化理解教育におい

て一定の成果があったと言える。

一方で、どの程度、他者に関心を持ち理解を深めたかについてはまだ明確に示されたとは言えない。他者の考えを取り入れ異文化理解を深めるためには、「評価シート」や「振り返りシート」の改善はもとより、テーマの選択理由や動機が明確に示せるようなアプローチと、さらには調査活動後の展望なども描けるような授業設計の検討が必要である。加えて、資料の見せ方や発表態度、声の大きさなどスキル面での指導も不可欠である。

「異文化コミュニケーション演習」は留学生対象の授業である。つまり、日本で暮らす外国人に日本という異文化を理解し、日本人や日本社会と関わるにはどうすればよいかといった問題を投げかけ、その解決方法を考えさせている。ここで気をつけなければならないのは、異文化理解教育は一方的な押し付けではなく、真の相互理解が促される教育でなければならないということである。多文化共生社会においては、当然のことながら日本人の外国人に対する理解も重要である。

留学生の一人が報告会で次のような感想を述べている。

「日本にいる外国人は日本人についてポジティブに考えています。しかし、日本人の学生達は他人とコミュニケーションするのが苦手です。外国人と仲良くなりたいたのですが、なかなかできない」

（原文ママ。ただし、下線部は筆者加筆修正）

留学生にとって日本人の友達を作るのが難しい理由は、きっかけがないからではないかと先に述べた。しかし、きっかけができて、それ以後に関係が発展しない。この原因は、日本人学生側の異文化受容やコミュニケーション力に関係しているのではないだろうか。そして、留学生自身そのことを認識し、日本人との壁に悩んでいるのではないだろうか。北出（2020）が提案した異文化コミュニケーション能力育成を目指した日本人学生と留学生の協働学習授業で、ある留学生は日本での経験について、日本社会に「入る（involve）」から共通の目

的を持ったコミュニティに「携わる (engage)」という認識に変化したことが報告されている (p.84)。こういった視点から考えると、今後は日本人学生と外国人留学生が共に学び、意見を交換し、理解を深める「共修」授業も視野に入れ、授業改善を進めていくことも課題の一つである。

母国を離れ日本を選んで留学した学生たちが、これから何年先まで日本で暮らすかはわからない。しかし、多くの留学生が日本で就職を希望する中、日本に来てよかったと思えるような社会であることは誰しもが望むことである。多くの留学生を受け入れている大学という「場」において、授業という公的活動を通して相互交流や相互理解が促進されるような取り組みが必要である。

## 註

- 1) 加賀美常美代 (2016) 「大学・日本語学校と文化接触」『異文化間教育大系第2巻 文化接触における場としてのダイナミズム』第5章, pp. 90-91 明石書店
- 2) 文化庁文化審議会国語分科会 (2019) 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改定版」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo\\_70/pdf/r1414272\\_04.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf) (2022.09.30アクセス)
- 3) 履修者の日本語レベルは、日本語能力試験N1からN3を取得している学生が7割以上を占めるが、一部、特定の要素においてN3レベル未満の者がいる。
- 4) 本来は3~4名でグループを構成していたが、学生の出席状況から1名や2名のグループもできてしまった。
- 5) 非言語コミュニケーションに分類される場合もある。
- 6) 「バブル崩壊後の日本はこれまでの集団主義価値が薄れ、仕事より家庭、会社より個人という側面が強くなってきています。(中略) 現在の日本は集団主義と個人主義の両方の特徴をもち合わせていると言ってもいいでしょう。」(原沢, 2013. pp. 119-120)」

- 7) テキストには非言語コミュニケーションの例として、ジェスチャーや表情などの身体動作、体つきや髪型などの身体的特徴、接触行動、声の質や調子などのバラ言語、対人距離などの空間認識、服装や装飾品などの人工品 (原沢, 2013. pp. 173-174) が挙げられている。
- 8) 「アンケート調査報告会」で、発表の最初にテーマを選んだ理由を述べることとしている。

## 参考文献

- 井上孝代・伊藤武彦 (1997) 「留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康」日本心理学会『心理学研究』第68巻, 第4号, pp. 298-304
- 加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明 (2016) 『異文化間教育大系第2巻 文化接触における場としてのダイナミズム』明石書店
- 梶原綾乃 (2016) 「日本語能力混成クラスにおける異文化理解の授業—日本人に話しかける力の養成—」『朝日大学留学生別科紀要』13, pp. 25-37
- 北出慶子 (2010) 「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案—異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』9 (2), 言語文化教育研究会, pp. 65-90
- 菅川裕希 (2022) 「ディスカッション活動を通して留学生と日本人学生は何を得たか: 学びと友人関係構築に焦点を当てて」『広島大学日本語教育研究』32, pp. 8-15
- 徳井厚子 (2020) 『改訂版 多文化共生のコミュニケーション—日本語教育の現場から—』アルク
- 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html> (2022.09.30アクセス)
- 原沢伊都夫 (2013) 『異文化理解入門』研究社
- 八代京子他 (2001) 『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

## 抄 録

本稿は、留学生に対する異文化理解教育において、留学生の異文化理解を深化させることを目指して行った日本人に対するアンケート調査活動の授業実践について報告する。実践の結果、留学生はアンケート調査活動を通して、相手に対する「尊重」「共感」の態度、自己を「社会的存在」として捉え直していることが認められた。一方で、自己の内省からだけでなく、他者の意見からも異文化理解を深める必要性を確認した。日本人学生との共修も視野に入れた取り組みが今後の課題として示された。

キーワード：留学生，異文化理解教育，異文化コミュニケーション能力，アンケート調査活動